

シリーズ 1,いつまでも楽しめる宿根草の庭づくり

(2) 「いい加減で几帳面な土の耕し方」

職藝学院 教授 渡邊美保子

今回は、植栽の前に行う宿根草花壇の土の耕し方を説明しましょう。

前回説明した土壌改良材を花壇にまいた後、ボーダーフォーク（宿根草を掘り取る専用の道具）に足をかけて地面に垂直にさし、テコの原理で土を持ち上げひっくり返します。カニのように小股で横に移動しながら少しずつ土を返してゆきます。持ち上げた土をなるべく空中で回転させるようにしますと、空気を含んだ土が出来上がります。ボーダーフォークが無い場合は、ケンスコップでもかまいません。改良材と土が良く混ざるように、カニ歩きの幅をなるべく少なくとるのがコツです。せっちな人にこの作業をまかせるのは止めましょう。苗を植えるとき移植ゴテで地面を掘ると、バームクーヘンのような茶色い層が出てきます。

次に耕した表面をレーキを使ってならします。これで終わりではありません。実はこれからがプロの技です。トレディングという技を紹介します。ふかふかにした地面を踏む作業です。まず花壇に入り、足を地面から離さずに再びカニ歩きの要領で横に進んでゆきます。花壇の端までいったら靴のサイズだけ後ずさりして、今度は逆方向へ平行移動します。トレディングの目的は、均等に踏むことにより、地面がへこむところ、高い所を足の裏で知ることです。その後、足の裏で感じた高低差をなくすように再びレーキでならすと、均等に圧力のかかった花壇の土壌ができあがります。トレディングは根っこの生育を良くするために行います。耕した後の土は表面的にはふかふかに見えますが、地面の中では、部

分的に空洞ができていたりします。この部分に雨が降るとストーンと土が落ち込んで水溜りの原因になり、根の生育に影響を与えます。そんな細かいこと～なんて思う方は園芸家にはなれませんよ。これが200年の歴史のあるガーデニング大国、英国の伝統的な手法なのです。この作業の終わった後は、絶対に花壇を踏んではいけません。絶対にです！苗を植える時はどうするのか？という、足のサイズよりも2倍の長さの細長い木の板を何枚か使います。行きたいところめがけてその板を投げて、飛び石をうつような感じで花壇に入ります。板を置くことにより、花壇に入る人の体重を分散させることができます。

英国の園芸の巨匠から学んだ最大の教えは、いい加減を知ること、そして几帳面であること。いい加減とは良い加減のことで、植物を育てた経験から生まれる幅のようなもの。この幅は、この範囲なら植物が生きられるということをおして体験した園芸家にだけ与えられる特権です。そして、几帳面とは、科学的に植物の生育を分析できる知識を持つということです。いい加減と几帳面の二つを兼ね備えた園芸家をめざして土を耕してみてください。

